

2 2 1

こんにちは。塾長の大井です。

6期生受験戦記第6回です。

Gくんと同じく小3体験授業からの生え抜き中の生え抜きであるHさんは、本当に一筋縄ではない個性派でした。授業で扱った文章に感動的な描写があって、みんなが「おもしろい!」「やさしい。」とため息をもらすような場面でも、「私は感動したことはない!」と言い放ったり、少子化を学ぶ授業の中では「私は子供とかいらぬ。めんどくさいから。」と発言してみんなを唾然とさせたり、かなりの異彩を放っていました。

なかなか物事の先行きや本質を見ようとせず、授業は好きでしたが課題の重要性を理解せずに、ずっと真摯に向き合おうとはしませんでした。

お母さんもそんなHさんに手を焼き、よく本気で叱っていましたが、Hさんはケロっとしていました。

そんなHさんでしたが、それでも彼女はTOPが大好きでした。授業でよ

く笑い、斜に構えながらも私たちが慕い、奥底に隠し持った優しさでみんなとつながっていました。ただ惜しむらくは彼女はTOPを好きであるあまり、TOPに通うことそのものが目的にすり替わっていたのです。そこで成長すること、自分と向き合うこと、自分がどんな中学で学びたいかなどには、彼女はほとんど頓着していませんでした。つまり、彼女の第一志望はTOPだったのです。

それでも、HさんがTOPに通い続けたこと、そしてお母さんがここしかない、彼女が変わる可能性をTOPに懸け続けてくれたことが、最後にモノを言うことになります。

そんな個性的な6期生の子どもたちでしたが、素直さにあふれた彼らには決定的に欠けているものがありました。

(次回につづく)

2020年10月15日

大井 雄之